

カトリック香里教会 年間第29主日 2021年10月17日
— イザヤ53章・10-11、ヘブライ4章・14~16、マルコ10章・35-45—

そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」
-マルコ10章-

神と人の僕に

イエスは 都、エルサレムへ登って行く途上で一行に、三度にわたって、ご自分の受難を予告しますが、弟子たちは、真に受けようとはせず、「都に上ったイエスは力で都を制圧し、王となって、自分たちは重要なポストに就くのだ」と、二人の弟子は、こっそりイエスに取り入ろうとする始末です。イエスは一同を呼び寄せて語ります。

”異邦人の間では支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかしあなたの方の間ではそうであってはならない”と。異邦人の間とは、『拝すべき神』を知らず、人間の価値観で生きている人々の世界です。それは、人が人を苦しめて文句を言わせないシステム、いわゆる、勝ち組が思うように支配する「勝ち組の世界」です。

十字架の道に無理解なこの弟子たちに、イエスはご自分の受難の意味を解き明かされるのですが、それは、旧約の聖書の歴史が2千年を経た今日にまで私たちに語っていることです。

■創世紀は『三つの起源』を語ります。

- ① 世界の起源＝すべては良かった楽園の世界
- ② 人とその罪の起源＝不従順による失楽園(罪の世にいる私たちの世界)
- ③ 信仰の起源＝アブラハムの信仰と、楽園回帰の旅(神による人類救済計画)

■出エジプト記は、選民にとって奴隷からの解放による「神の救いの原体験」となるが、荒れ野の40年間の試練につまずき、その後も神への不従順で国を滅ぼす。

■ついに主イエスが到来し、人類の救いのため、民が40年間の荒れ野で果たせなかった「アブラハムの信仰」を、イエスは「40日の荒れ野の試練」で実現し、その成就のため、父なる神への贖罪の生贄となるため今、十字架に向かうのです。

贖罪とは、キリストが全人類に代って十字架に登って死んでくださったことであり、それによって人類は罪が許され、再び神に結ばれて楽園回帰で私たちの救いが実現するのです。司祭は、ミサの中で、このイエスを『贖罪の生贄』として御父に捧げることで、キリストを通して祭壇上に下られた神を信者に示し、信者は神と交わる恵みに預かるのです。

神と人とを一つに結ぶ役割はイエスの使命であり、司祭はこの大祭司イエスの使命に与って、その役割を信者に提供しているにすぎません。

信者はミサごとにこの偉大な大祭司神の子イエスが与えられているのですから、いかなる時も、試練や十字架を厭わず神に忠実な信仰を保つ恵みを願わなければなりません。十字架のもとに佇んだマリア様のとりなしによって。



教会の庭のマリア像